

地方都市視察報告書

文教子ども家庭委員会

- 1 実施日 令和5年10月31日（火）
- 2 視察地 宮崎県都城市

【市の概要】

- (1) 面積 653.36km²
- (2) 人口・世帯数
(令和5年11月1日現在)
○人口 161,266人
○世帯数 80,946世帯



- (3) 平成18年1月1日、都城市、山之口町、高城町、山田町、高崎町が合併し、新・都城市が誕生した。少子・高齢化の進展や地方分権、モータリゼーション(車社会)・通信情報手段の進展や生活様式の変化などにより、広域的なまちづくりへのニーズが高まり、平成16年2月に1市4町の枠組みによる合併協議会を結成。新たなまちづくりのための協議が行われた。

現在、都城市の人口は、南九州では鹿児島市、宮崎市に次いで3番目。面積についても、653.36平方キロメートルで、県内第2位となっている。

交通では、九州縦貫自動車道、5本の国道をはじめ主要地方道が整備され、JR日豊本線・吉都線の2本の鉄道が走り、40キロメートル圏内に宮崎空港と鹿児島空港がある。さらに、国の重要港湾の指定を受けて着々と整備が進んでいる志布志港と直結する地域高規格道路「都城志布志道路」も着工の運びとなり、陸・海・空の条件が整いつつある。

都城市は、交通の要所として、また三股町、鹿児島県曾於市・志布志市の一部を含む25万人の経済圏の中心都市として、さらには南九州における産業・経済・教育・文化の中心的役割を担う「南九州の広域交流拠点都市」としてのまちづくりが期待されている。

- 3 視察項目・内容
都城市立図書館及び都城市子育て世代活動支援センターについて

- 4 視察参加者

【委員】

三沢 ひで子委員長	近藤 なつ子副委員長	小野 裕次郎委員
鈴木 ひろみ委員	渡辺 清人委員	渡辺 やすし委員
おやまだ 静香委員	有馬 としろう委員	下村 治生委員

【随行】

議会事務局議事係 川野辺 洋 黒木 明子

5 視察結果・所感

百貨店などが次々と撤退する中、「人と人とのつながりを取り戻す」という観点から中核施設として様々な施設を造っていくという構想のもと、市として取組を進めてきた。平成30年4月に開館した図書館自体は、ショッピングモールを改修しており、「延べ床面積が9,200㎡、天井が18.7m」とゆったりとした印象であった。

施設全体としては、ターゲット層を「子育て世帯の女性」とし、子育て世代活動支援センターと図書館との間を雨天時でもベビーカーを押して往来ができるように屋根を設けており、乳児健診や離乳食講座で親しくなった母親同士が、そのまま子育て活動支援センターを活用したり、図書館で絵本を選びに行くなど、「子育ての施設」と複合化された形で設置されており、スムーズに活用されていた。

図書館においても、オープンスペースが多く、様々な工夫がされている。まず、話しながら誰でも図書館内を往来できる一方、サイレントルームも設けていた。また、図書館内でベビーカーを押したまま本を選べるよう、表紙を前にして1冊ずつ展示する、車椅子の方でも本を選べるように上の段と下の段には本を置かない、本を読みたい方以外にも来ていただけるよう、例えば、スポーツコーナーでは、ユニホームなどを展示することで視覚的に訴え、そこから関連本を選べるようにするなど、様々な工夫がされていた。また、若者向けにティーンズスタジオなどがあり、幅広い層にアピールするなど、市民の声を活かして様々な工夫がされていた。

新宿区においても、レイアウトの工夫など区民の声を活かした様々なリノベーションについて参考になるものと思われた。

6 主な質疑項目

- (1) 市立図書館を設置することになった経緯と考え方について
- (2) 市立図書館建設の際の財源について
- (3) リノベーションした新しい図書館の運営について
- (4) 図書館に学習室があることの魅力について
- (5) 皆が何度も訪れたい図書館にするため、特に力を入れたことについて
- (6) 図書館職員の自発的な取組みについて
- (7) 子育て世代活動支援センター利用者の目線に立った運営について
- (8) 女性をターゲットにする上でこだわった部分について
- (9) 図書館の集客が及ぼす町全体への波及効果について
- (10) 周辺には遊び場などがあり、子育て世帯には魅力的である中、来場者が多くなり過ぎたことによる問題や対策について

7 その他

【共同視察者】

子ども家庭課長
中央図書館長

徳永 創
山本 秀樹